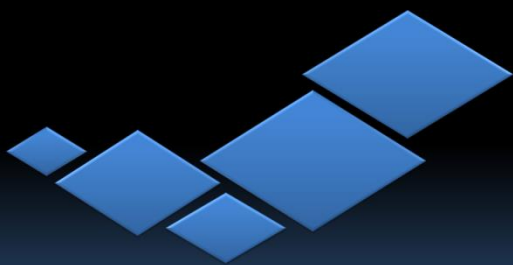




Title	月刊DRF 第71号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2015-12-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73638
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_71.pdf



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第71号

No. 71 December, 2015

【特集 1】 2015年オープンアクセス10大ニュース

【特集 2】 図書館総合展フォーラム「機関リポジトリの近未来」レポート

【レポート】 SPARC Japanセミナー

【連載】 かたつむりとオープンアクセスの日常

特集1 2015年オープンアクセス10大ニュース

今年も国内外のOA界に様々な動きがありました。内容別に主要トピックをおさらいします。

リポジトリの基盤整備

NIIでJaLC準会員受付開始、 機関リポジトリにDOI付与可能に

平成27年3月より、国立情報学研究所が取りまとめるJaLC準会員の一般募集とJaLC DOIの登録が開始されました。

IRDBへデータ提供を行っている機関は、JaLC準会員に参加することで、機関リポジトリで公開しているコンテンツにDOIを付与できるようになります。

機関リポジトリでのJaLC DOI登録について月刊DRFで特集していますのでご参照ください。

- ・「機関リポジトリ担当者のためのJaLC DOIスタート講座」([第60号](#))
- ・「JaLC DOIスタート講座～マルチプルレブリュエション編～」([第63号](#))

京都大学「京都大学オープン アクセス方針」を採択

平成27年4月28日に京都大学で「京都大学オープンアクセス方針」が採択されました。これは、京都大学の教員が執筆した学術論文等の研究成果を「京都大学学術情報リポジトリKURENAI」により原則インターネット公開することを教員の義務とするものです。11月19日に筑波大学でもオープンアクセス方針が採択されたほか、いくつかの大学でOA方針策定を検討する動きが出ているようです。

京都大学では現在、実施上の詳細を検討している段階とのことで、実施開始後の運用方法に注目が集まります。採択に当たった担当者インタビューを月刊DRF [第65号](#)に掲載していますので、こちらも併せてご覧ください。

イベント

「機関リポジトリ新任担当者研修」 及び「中堅担当者研修」開催

機関リポジトリ推進委員会主催で「機関リポジトリ新任担当者研修」及び「機関リポジトリ中堅担当者研修」が開催されました。

今年度の新任担当者研修はJAIRO Cloud講習会と合同で、年5回開催されました。レポートは月刊DRF [第68号](#)に掲載しています。

また、中堅担当者研修は10月13～14日の2日間、神戸大学でのHORIZON2020国際シンポジウムと連携して開催されました。参加レポートは月刊DRF [第70号](#)に掲載しています。

図書館総合展フォーラム 「機関リポジトリの近未来」開催

11月11日にパシフィコ横浜で機関リポジトリ推進委員会主催・DRF共催フォーラム「機関リポジトリの近未来：オープンアクセスからオープンサイエンスへ」が開催されました。

オープンサイエンス推進や日本の機関リポジトリコミュニティの新しい姿について講演やパネルディスカッションがありました。特に第3部では、「機関リポジトリの今、近未来のために」として事例報告とディスカッションを行い、DRF企画WGが運営に協力しました。フォーラムの内容は今号で詳しくレポートしています。

政府・出版社の動き

DRF、エルゼビア社の共有ポリシーへの反対声明に署名

4月30日にエルゼビア社は新たな共有ポリシーを公表しましたが、これに対してCOARは反対の立場を表明しました。DRFはこのCOARの立場に賛同し、6月2日反対声明に署名しました。反対声明には11月25日現在285機関が署名しています。なお、エルゼビア社はこの反対声明に対して反論コメントを公表しています。

このことに関しては、月刊DRF第66号に報告記事を掲載していますので、併せてご覧ください。

内閣府「我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について～サイエンスの新たな飛躍の時代の幕開け～」公表

3月30日に内閣府の国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会が報告書「我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について～サイエンスの新たな飛躍の時代の幕開け～」を公表しました。論文のオープンアクセスはもちろんのこと、研究データもオープンにすべきという、学術情報のオープン化に係る基本方策が打ち出され、オープンアクセス・オープンサイエンスの大きな追い風となりました。

オープンサイエンス推進をめぐる動きについては月刊DRF第69号で特集しています。

DRFの動き

月刊DRF5周年

月刊DRFは平成22年2月に創刊し、今年2月発行の第61号をもって5周年を迎えることが出来ました。これまで月刊DRFでは、機関リポジトリやオープンアクセスに関する多くのトピックを取り上げてきました。今後の月刊DRFにもぜひご注目ください。

月刊DRF第61号では、月刊DRF5周年を特集していますので、こちらもご覧ください。



DRFオンラインワークショップ開催

本年度のDRFオンラインワークショップは、11月18日から2月末までの日程で開催しています。テーマは「研究データから研究プロセスを知る」です。また、ワークショップの目的として、「研究者が日ごろの研究で扱うデータにどのようなものがあるのか調査することで、機関リポジトリでデータを扱おうとする担当者の一助とする」ことなどを掲げています。参加者が各々で研究者インタビューを行う活動をメインに据えて、現在活動を進めている状況です。

このワークショップに関しては、月刊DRFにおいて活動報告を行う予定ですので、ご期待ください。

その他の動き

CiNii Dissertations公開

国立情報学研究所は博士論文データベース「CiNii Dissertations」を6月に試験公開、10月に正式公開しました。このサービスによって、日本の博士論文の網羅的検索を行うことが出来るようになりました。また、電子版が公開されている博士論文に関しては、本文表示が可能です。これにより、博士論文の検索や閲覧が大幅に容易になったと言えるでしょう。

博士論文と連携サービスのしくみについて月刊DRF第68号で特集していますので、こちらもご参考ください。

「全国遺跡報告総覧」公開

奈良文化財研究所は6月25日、「全国遺跡報告総覧」を公開しました。これは、全国21の国立大学図書館が中心となって運営を行ってきた「遺跡資料リポジトリ」を統合したものになります。この「全国遺跡報告総覧」の公開により、発掘調査報告書を一元的に検索することが出来るようになりました。

「全国遺跡報告総覧」の特集をした月刊DRF第67号には、公開までの経緯と今後の計画に関しての寄稿記事を掲載しています。

機関リポジトリの近未来

オープンアクセスからオープンサイエンスへ（第17回図書館総合展）

11月11日に第17回図書館総合展において、機関リポジトリ推進委員会主催・DRF共催の研究集会「機関リポジトリの近未来—オープンアクセスからオープンサイエンスへ」が開催されました。参加された方々にその様子をレポートしていただきました。

第1部 オープンアクセス政策と大学図書館

レポート／慶應義塾大学 村野 亜子氏

第1部では、立場の異なる4名の方よりオープンサイエンスの概要や取り組み、課題などを伺うことができました。

最初の真子博氏（内閣府）によるご講演では、RDA（Research Data Alliance）などによる国際的な動きに比べると、日本は少し立ち遅れている現状が示されました。そのため、「第5期科学技術基本計画（2016-2020年度）」では国際動向を踏まえてオープンサイエンスをさらに推進していく必要があると述べられました。

2番目の渡邊和良氏（文部科学省）によるご講演では、今後は単なる論文公開だけではない、研究データを含む研究成果の利活用の重要性を述べられました。また、検討事項（データ管理計画、公開方法、人材育成等）は多いが、まずはオープンサイエンスの考えを研究者と共有し、できるところから始めるのがよいとのことでした。

3番目の岡田啓一氏（科学技術振興機構）は、科学技術情報委員会が2015年4月に公開した「わが国におけるデータシェアリングのあり方に関する提言」を主軸にご講演されました。また、前述したRDAの第



7回総会が2016年3月に日本で開催されることから、これを契機に国内オープンサイエンスの機運が醸成されることを示唆されました。

最後の尾城孝一氏（東京大学）によるご講演では、オープンサイエンスの推進に向けて今後行うべき取り組みとして、「方針（ポリシー）の策定」「研究データに関する取り組み」「学協会著作権ポリシーデータベース（SCPJ）の維持管理」「公的研究資金による成果論文のトラッキング」の4点を挙げられました。

以上の講演の中で最も印象に残ったのは、「大学図書館がオープンサイエンスを動かすのではなく、図書館がキーパーソンとなって大学全体でオープンアクセスに向かうべき」という真子氏の言葉でした。そのためには、研究データ公開をどのように進めるか、および研究者の意識改革をどのように行うかがオープンサイエンスを進める上での鍵になると感じました。

第2部 コミュニティの力

レポート／お茶の水女子大学 石橋 優花氏

第2部は、「コミュニティの力」をテーマに、左にベテラン4名、右に若手4名が並び、計8名のパネリストによるディスカッションが行われました。

まず、日本の機関リポジトリ／オープンアクセスを推進している、デジタルリポジトリ連合（DRF）、JAIRO Cloud（JC）利用機関コミュニティ、機関リポジトリ推進委員会に、JCを開発・運用している国立情報学研究所を加えた四者から、各々の取り組みと3つの組織を一体化する新協議会について紹介がありました。

従来のオープンアクセス関連の活動に加え、研究デー

タの公開など、公的助成を受けている全ての学術機関が取り組むべき新たな課題に対し、関係者の力を結集して、より組織的に活動を展開していくことが新協議会設立の目的です。グローバルな連携が進む中、日本の取り組みをアピールする顔としての役割も期待されます。

若手からは、「現在のWGでの取り組みは継続できるのか」「新組織は本当にうまくいくのか。過去の成果が生かされにくいことが問題」「先進的な大学とこれからの大学との差が拡大している。今こそ人材育成に力を入れたい」「会員制にした場合、情報共有や活動がどこまでオープンにできるのか」といった疑問・意見が寄せられました。「我々のコミュニティはオープンアクセスを目指しているので、なるべくオープンで行きたい」という言葉が印象的でした。

1年目の自分には分からない用語や理解の追いつかない部分もありましたが、日常業務で行っている1つ1つの作業に実はどんな目的・意味があったのかを意識するきっかけになりました。まずは自分の大学でどんな研究が行われているか把握して、データの収集範囲をもっと広く捉え直したいと思います。

登壇者の並びから、これまでの成果と課題を継いで、新しいコミュニティが新しい時代を作っていくことが感じられました。学んだことの手応えはあったので、こうした場に参加すること、意識しつづけることが大事なのだと思います。



意見交換会

オープンサイエンスのために大学図書館は何ができるのか？

レポート／DRF企画WG・鳥取大学 中谷 昇

フォーラムの第2部と第3部の間、30分程度の時間を使って、「オープンサイエンスのために大学図書館は何ができるのか？」と題した意見交換会が催されました。オープニングトークとして、三角太郎氏（千葉大学）より、改めて機関リポジトリを取り巻く現状が概観された後、会場を交えたディスカッションが行われました。

この場で特に印象深かったのは、三角氏より言及された、現在の国内機関リポジトリにおける研究データの登録・公開は、その9割以上が特定一部の機関によるものである、という点と、会場から聞かれた、「地方の担当

者レベルまで議論を浸透させてほしい」「研究者も巻き込んだ議論をしてほしい」という意見でした。自身がリポジトリの担当となって、研究データを扱った経験はほとんどないということ、またDRFとの関わりが薄ければ、今ほどオープンサイエンスというものを意識していなかったであろうことを思うと、どちらも一担当者としての実感をもって受け止められるものでした。第1・2部にて、研究データを含むオープンサイエンスの推進のために、担当者単位での意識・活動や研究者への働きかけが重要である、とされたことも重なり、現場の人間が積極的に関与すること、またそうせざるを得ない環境をつくることの意義が強調されたように感じました。

短い時間ではありましたが、今後、オープンサイエンスを軸としたリポジトリ業務へ取り組んでいくために、現状を再認識し姿勢を改める良い機会となりました。

第3部

機関リポジトリの今、近未来のために

レポート／広島市立大学 松下 真紀子氏



第3部では、4人の方の事例報告があり、その後会場参加者のアンケートで寄せられた質問に登壇者が答える形の質疑応答がありました。

まず、佐々木翼氏（北海道大学）による「北海道大学における博士論文電子公開の取組み」と題した報告がありました。北海道大学での博士論文公表率はおよそ70%であり、現在検討中であるのは、チェックリストの様式や、要約公表の論文の一定期間経過後原則公開ができないか等であることの報告がありました。

続いて鈴木秀樹氏（京都大学）から「京都大学オープンアクセス方針」と題した報告がありました。京都大学では、OA化の方針が検討からおおよそ1年で比較的スムーズに決定しており、対象は主に学術雑誌、理由があれば申請により公表しないこともできること、方針施行以前の研究成果にはこの方針は適用しないことなどの決定事項の説明がありました。

川村拓郎氏（広島大学）からは「広島大学における学内刊行物の発信強化」と題した報告がありました。広島大学では学内ジャーナルの国際発信力強化のため、リポジトリ登録を条件とした学内和文誌の英文抄録校正費補助、電子ジャーナルプラットフォームの無料提供、DOIの付与（順次準備中）を行っているとのことでした。



最後に佐藤恵氏（東北学院大学）による「教員・学内他部署との連携・協働」と題した報告がありました。現在立ち上げから1年半であり、図書館ではなく大学のリポジトリ、自学ならでは内容のリポジトリを目指していること、事務部門との連携では教授会で事務職員が話すのは前例のないことと後で知ったこと、教員との連携ではカウンターは委託なのでそこで接する機会がない中、きっかけを得た事例など、具体例が散りばめられた報告でした。

第3部での報告は、実際に似たような事例をかかえていたり、あるいは今後通る道かもしれないと思える事例もありました。各館での取り組みを悩みも含めて伺うことができ、とても有意義な時間となりました。



第2回 SPARC Japanセミナー2015

2015年10月21日、第2回SPARC Japanセミナー2015（オープンアクセス・サミット2015）が開催されました。テーマは「科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて- e-サイエンス、研究データ共有、そして研究データ基盤 -」です。

セミナーは三部構成で行われました。第1部は、研究データに関する国際組織であるRDA（Research Data Alliance）の事務総長Mark Parsons氏による基調講演でした。Parsons氏によると、オープンデータの基盤整備のためには、ボトムアップのアプローチをとる必要があるとのこと。また、コミュニティの関係強化を通じた信頼構築の重要性を強調されていました。

続く第2部では、「サイエンスと研究データ」というテーマで、北本朝展氏（国立情報学研究所）、池田大輔氏（九州大学システム情報科学研究所）、能勢正仁氏（京都大学大学院理学研究科）のお三方が講演されました。ここでは、サイエンスの現場において研究データがどのように扱われているのかについて、具体的なお話を聞くことが出来ました。データ共有に関しては、研究分野ごとに異なる文化を持っているということを理解しておく必要があると感じました。

第3部は、加藤斉史氏（科学技術振興機構）、田中良昌氏（国立極地研究所）、大山敬三氏（国立情報学研究所）、星子奈美氏（九州大学附属図書館）によるご講演でした。ここでは、「日本の研究データ基盤」というテーマの下、日本の研究データ基盤の実情についてお話がありました。特に星子氏による講演は、事務職員の実務に焦点を当てた

ものであり、図書館員にとって注目すべき内容であったように思います。そこでは、今後オープンデータに関して、学内の関連部署が連携して業務を進めていく必要が生じる可能性があることなどが指摘されていました。

セミナーはサイエンスの領域にも足を踏み込んだものであり、その内容を余すところなく理解できたとは言いがたいですが、今後オープンデータについて考えていく上での様々な視点を獲得が出来たと感じています。

（レポート/DRF企画WG・千葉大学 塩田 知也）

※ 発表資料は下記で公開されています。

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20151021.html>



Mark Parsons氏による基調講演の様子



論文がネガティブに引用されることは少ないが、ネガティブなTweetをされることはけっこう多い

People do not cite papers in negative ways, but tweet about them in.

某誌の依頼を受けて最近altmetricsについて調べています。オープンアクセスの文脈の中でも、新たな研究評価指標としてのaltmetricsの可能性に言及されることがしばしばありますが、自分としては今のところ「面白いものや話題性のあるものを見つけ出すには良いが、一般的な評価には使い物にならない」と考えています。そもそも被引用数に基づく評価にも自分は懐疑的な立場を取っていますが、altmetricsは今のところそれ以上に慎重に扱うべきです。

…なんてことを考えていたところ、ちょうど論文の中で引用と、altmetricsの集計によく用いられるTwitter上でのつぶやきについて、対照的な2つの研究が発表されました。

そもそも被引用数が研究評価に用いられる前提には、他者に引用される研究はその内容を評価されたから引用されたのである、つまり引用＝ポジティブなものである、という認識があります。しかし引用の中には、その研究を批判するために引用するなど、必ずしもポジティブな評価につながるわけではない、ネガティブなものもあるのではないかと、という指摘もされ続けています。

この疑問の答えにつながるのが、今年10月に米PNASに掲載された、Christian Catalini氏らの論文“The incidence and role of negative citations in science”です[1]。Nature誌のニュース記事になり[2]、カレントアウェアネス-Rにも取り上げられた[3]のごで存知の方もいるかもしれません（ちなみに取り上げたのは自分です）。この論文では免疫学者の協力を得て、論文をネガティブに引用する際に使う表現を収集し、自然言語処理技術によって“Journal of Immunology”誌に掲載された約16,000本の論文の、76万以上の引用の中からネガティブな引用を特定しています。分析の結果、引用先の研究を批判する等、ネガティブな引用は全ての引用の2.4%にすぎない、とされています。しかもNature誌のニュース中では“「ネガティブ」の範囲が広すぎるのでは”といった指摘がされており、実際にはネガティブな引用の割合はさらに下がる可能性があります。一分野の雑誌のみを対象にした結果ですが、さしあたり論文での引用を研究評価に用いる前提は担保された、と言えるかも知れません。

一方、同じく今年10月に、altmetricsに関連する研究のみを集めたワークショップaltmetrics15で発表されたNatalie Friedrich氏らの研究“Do tweets to scientific articles

contain positive or negative sentiments?”[4]では、Twitterの場合は様相が異なることが示されています。この研究では2012年に出版された原著論文・レビュー論文で、Web of Scienceに収録されているものに言及したTweet（Twitter上のつぶやき）を収集し、そのつぶやきの中にポジティブあるいはネガティブな感情を伴う語が含まれているかどうかを分析しています。Retweet等は除き、192,832論文について言及した487,610のTweetが分析対象となりました。分析の結果、そもそも8割以上のTweetはポジティブな感情もネガティブな感情も伴っていませんでした。さらに、ポジティブな感情を伴うTweetが11.0%であったのに対し、ネガティブな感情を伴うTweetは7.3%存在しました。ポジティブなTweetとネガティブなTweetの比はちょうど3:2程度になります。論文中での引用に比べると、Tweetの場合はネガティブな感情を伴ってなされることがかなり多いと言えます。

自分の論文が他人の論文の中で批判されることはめったにないが、他人のTweetの中で攻撃されることはけっこうある。言われてみれば、自分の実感にもそった結果です。もちろん、「ネガティブな感情を伴う」と「ネガティブに引用する」ことは別の話です。また、Friedrich氏らの研究では、自然科学系では感情を伴うTweetが少なく、社会科学、心理学、人文学でネガティブなTweetが多いと指摘しており、Catalini氏らが対象にしていた免疫学がたまたまネガティブに言及されにくい分野だった可能性もあります。とは言え、ポジティブ：ネガティブが3:2という結果は、少なくともある論文が「多くのTweetを集めている」ことを単純に評価してよいのか、躊躇させるには十分と言えるのではないのでしょうか。

[1] <http://www.pnas.org/content/112/45/13823.abstract>

[2] <http://www.nature.com/news/science-papers-rarely-cited-in-negative-ways-1.18643>

[3] <http://current.ndl.go.jp/node/29785>

[4] <http://altmetrics.org/altmetrics15/friedrich/>

佐藤 翔

同志社大学免許資格課程センター
助教。

ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」(<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>) 管理人。



■ 次号予告 ■ 【特集】機関リポジトリ担当者のための (もう一度)OAI-PMHって何？ ほか

月刊DRFでは、みなさまからのお便りを
お待ちしております。

✉ gekkandrf@gmail.com

読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



Facebook

<https://www.facebook.com/Digital-RepositoryFederation>